

2023 年 7 月 23 日（日）「天の礼拝」

ヨハネの黙示録 4:1-11（その 1）

1 その後、私が見ていると、開かれた扉が天にあった。そして、先にラツパのような声で私に語りかけた、あの最初の声が言った。「ここへ上って来なさい。そうすれば、この後必ず起こることをあなたに示そう。」2 私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。3 その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。4 また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。

5 玉座からは、稲妻、轟音、雷鳴が起こった。また、玉座の前には、七つの松明が燃えていた。これは神の七つの霊である。6 また、玉座の前には、水晶に似たガラスの海のようなものがあつた。この玉座の中央とその周りに四つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があつた。7 第一の生き物は獅子のようであり、第二の生き物は若い雄牛のようで、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空を飛ぶ鷲のようであつた。8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その表にも裏にも一面に目があつた。それらは、昼も夜も絶え間なく唱え続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方。」

9 これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、10 二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。11 「私たちの主、また神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」

【序論】

私たちは限られた時間の中で、地上の礼拝を守っております。私は毎週礼拝に臨むとき、もしかしたら今日という日が地上で守る最後の礼拝になるかもしれない、そんな思いが脳裏を駆け巡ります。ここで共に礼拝をささげているメンバーの皆様は、主が私の人生に与えてくださった宝であり、私の魂の一部であると言ってもよい。キリスト者でなければ出会うことのなかった仲間であります。この教会の牧師に召してくださった主に深い感謝をささげております。そして、この礼拝が永遠とのつながりを持っており、地上の生涯を終えた後も共に賛美し、今度は主イエスご自身が語ってくださる説教に耳を傾け、主が分餐して下さるパンと杯にあずかる日を夢見しています。

今日から学んでいく 4 章は、天上の礼拝の様子を描いています。地上の言葉では十分に表し尽くせない事柄を、著者ヨハネは懸命に読者に伝えようとしている。書かれていることは不思議であり理解しきれないところもありますが、想像力たくましく永遠の神の国の真理を聞き取ってまいりましょう。

【本論】

本論 1. 語りかける声

その後、私が見ていると、開かれた扉が天にあった。そして、先にラツパのような声で私に語りかけた、あの最初の声があった。「ここへ上って来なさい。そうすれば、この後必ず起こることをあなたに示そう。」(4:1)

3章とのブリッジになっているのが冒頭の「その後」です。2～3章にかけてヨハネは主イエスからの七つの教会へのメッセージを取り次いだわけですが、その任務を遂行し終わったとき、天の扉が開かれました。彼は言いにくい事柄も包み隠さず語ってきましたが、その忠実さに対する主イエスからの報いとして、天上の礼拝の様子が啓示されていくのです。ここからの描写は、絵画的であり音楽的でもあります。地上の言語では表現しきれないことを、どうにか読者が想像できるように伝えている。

ヨハネに呼びかけた声は「ラツパのよう」でありました。その声は既に 1:10 にも出てきましたが、聖書では神が現れるときや新しい世界へと移行するときに、決まって「ラツパの響き」が鳴り渡ります。その大きな声は、ヨハネに上って来るよう命じます。天と地をつなぐ梯子のようなものがあつたのか、あるいは高い山を登って行ったのか。イメージとして、過去にモーセが神からの啓示を受けるためにシナイ山に登ることが命じられた箇所がありますが、それと似ています。少し長いですが、今日の箇所との関連性が強いので、読んでみましょう。

三日後の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上に臨み、角笛の音が極めて力強く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた。モーセは民を神に出会わせるために宿営から連れ出した。彼らは山の麓に立った。シナイ山は山全体が煙に包まれていた。主が火の中を通って、山の上に降り立たれたからである。煙は炉の煙のように立ち上り、山全体が激しく震えた。角笛の音がますます力強くなったとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴で答えられた。主はシナイ山の頂に降り立ち、モーセを山の頂に呼び寄せられたので、モーセは登って行った。

(出 19:16-20)

ヨハネが上って行く姿は、このときのモーセと似ています。通常人間には隠されている神の秘密が、特定の人々に明らかにされる。ヨハネに対して「この後必ず起こることをあなたに示そう」と言われていますが、それはこれから教会と全世界に対して神が何をなさろうとしているかのご計画です。その内容は 22:5 まで続きます。私たちも黙示録の読者として、この神の啓示にふれることになる。これは限られた人に知らされる真理であり、それを理解するためにはどうしても説き明かしが必要です。私自身も説教者として襟を正してこれに取り組もうとしています。その啓示全体の中には、この世界で暗躍する悪魔の計略とその審きも含まれている。しかし、それに先立って示されていくのは、天上の礼拝の様子です。天の玉座に坐する神の権威がまず前提とされなくてはならない。

本論 2. 玉座に座る方

私は、たちまち霊に満たされた。すると、天に玉座があり、そこに座っている方がおられた。その座っている方は、碧玉や赤めのうのように見え、玉座の周りにはエメラルドのような虹が輝いていた。(4:2-3)

古代において、「天」はお碗をひっくり返したような半球体の形がイメージされていました。その中心に神が座しておられるのをヨハネは見た。神の姿については、ただただ宝石の美しい輝きになぞらえて説明されているだけです。私は宝石に関する知識がほとんどないものだから、後学のためにここに出てくる石を調べてみました。



碧玉



赤めのう



エメラルド

玉座に「座っている方」自身が真っ赤な様相をしておられたということは、燃える炎のようなイメージを伝えようとしているのでしょう。人は神を見ることができませんので、希少な宝石の輝きでしか表現できなかったのです。この「赤」は神の高貴さを表しています。そして、それとは正反対の透き通るようなグリーンは、神の美を表現しているようです。虹は通常アーチ型に現れますが、気象によっては逆さまになったり、横棒のようになり、様々な形になるようです。神の威光を表すこれらの絵画的描写は、旧約聖書の中にも度々出てきました。

生き物の頭上の大空高くに、ラピスラズリの玉座のようなものが見えた。その玉座のようなものの上にひとときわ高く、人の姿のようなものがあった。私は、腰のように見えるものの上に、琥珀金のきらめきのようなものを、その周りに火のようなものを見た。腰のように見えるものの下に、火のようなものを見た。その周りには輝きがあった。周りの輝きは、雨の日に雲の中に現れる虹の姿のようであった。これは主の栄光のような姿であった。私はこれを見てひれ伏した。私は、語る者の声を聞いた。(エゼキエル 1:26-28)

このように、旧約の預言者にも新約の使徒にも、主は同じ栄光を垣間見せられたのです。イスラエルの大祭司が衣装につけていた様々な宝石は、神の玉座をそれとなく表していたのでしょう。

第一列はルビー、トパーズ、エメラルド。第二列はくじゃく石、ラピスラズリ、縞めのう。第三列はオパール、めのう、紫水晶。第四列はかんらん石、カーネリアン、碧玉。それらの枠に金の縁取りがなければならない。(出 28:15-20)

本論 3. 二十四人の長老

また、玉座の周りに二十四の座があり、それらの座には白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶった二十四人の長老が座っていた。(4:4)

神を礼拝するためにズラッと並んでいる 24 人の長老がいたと伝えられています。古代世界では一般的に統治者の前には助言者がいたと言われているから、この長老たちは神が決定される事柄の一部を担っているのでしょう。「二十四」という数字は、旧約のイスラエル十二部族と新約の十二使徒の合計だと言われています。つまり、旧約と新約を合わせた普遍的な教会、全歴史の聖徒たちの代表としてこの人々は選ばれている。「白い衣」とはキリストの義を表し、彼らがキリストの血で贖われた者であることが誰の目にも明らかとなっている。更に、彼らは「金の冠」を被っていることから、神の国の王権を担う器であることが分かります。実は、この「白い衣」と「金の冠」は、彼らだけの占有物なのではなく、贖われたすべての聖徒に与えられるものです。

歴代誌上 25:9-31 には、旧約時代の神殿聖歌隊の担い手が 24 組選ばれていたと書かれています。更に各組に 12 人ずつ割り当てられ、総勢 288 人の音楽奉仕者がそこに並んで奉仕したようです。

彼らは皆、父の指示に従って主の神殿でシンバル、豎琴、琴を奏で、歌を歌って神殿の奉仕を果たし、王やアサフ、エドトン、ヘマンの指示に従った。主に歌を歌うための訓練を受け、熟練したその兄弟たちの数は全部で二百八十八人であった。彼らは年少者も年長者も、熟練した者も修業中の者も等しく、任務のためのくじを引いた。(歴代上 25:6-8)

この壮大な聖歌隊が導く賛美とは、どのようなものだったのでしょうか。彼らはイスラエル十二部族の中から選ばれた人々であり、この代表者によって全イスラエルの賛美がリードされたのです。黙示録の 24 人の長老たちは、おそらく天国の全会衆の賛美をリードする役割を担っているのでしょう。

これらの生き物が、玉座に座り、世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉れと感謝とを献げる度に、二十四人の長老は、玉座に座っている方の前にひれ伏し、世々限りなく生きておられる方を礼拝し、その冠を玉座の前に投げ出して言った。「私たちの主、また神よ、あなたこそ、栄光と誉れと力を受けるにふさわしい方。あなたは万物を造られ、万物はあなたの御心によって存在しました造られたからです。」(4:9-11)

この長老たちと共に礼拝している「生き物」については次回説明させていただきますが、かいつまんで申しますと、彼らは「神の民」を表し、長老たちと共に「昼も夜も絶え間なく」「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主。かつておられ、今おられ、やがて来られる方」と賛美し続けています(4:8)。

大学時代にクワイアでヘンデルのメサイアを毎年歌っていましたが、ハレルヤコーラスやアーメン唱はまさに天国の賛美を彷彿させるものでした。師匠は聖歌隊を舞台側と会場の最後列に立たせてステレオ効果を狙っていましたが、天地が一つになることをイメージしていたと思います。

【結論】

このような箇所から説教を作るとき、説教者は最大限に想像力を膨らませ、天国の礼拝というものをイメージします。そうしなくては何も語れないのです。そして、その賛美者の一人に自分が加えられている姿も思い浮かべます。自分だけではありません。この会衆のメンバー一人ひとりが共に歌っている様子が見えてくるのです。今礼拝に参加している私たちは、この永遠の賛美、天国の礼拝と一つになっているということを忘れてはなりません。それだけに、一回一回与えられている礼拝の機会を大切にしたい。やがて私たちも、ヨハネが見た礼拝の幻の中にいることでしょう。黙示録を学びながら、私たちは自分の永遠に思いを馳せることができるのです。

【祈り】

永遠に礼拝されるべき天の父なる神様。あなたの許では時間は超越され、神を認めるすべての存在が一つとなって賛美をささげています。ヨハネは地上の言語によってその光景を垣間見せてくれましたが、私たちが現在においてささげている礼拝が天の礼拝とのつながりを持っているということを覚えます。現在において永遠を知ることができる、特別な時間を過ごしています。どうか一人ひとりの人生も、天の礼拝の許に置いてください。日曜日のみにあらず、すべての生活が主への礼拝と密接であることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
昔いまし、今いまし、永遠に生きてい給う、父なる神の愛、
信ずる者を永遠の礼拝者となし、神の御前に立たせ給う、主イエス・キリストの恵み、
先に召された聖徒と共に、地上での賛美を歌わせ給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。